

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月30日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330039

研究課題名（和文） ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策の国際比較研究

研究課題名（英文） The comparative studies of Media-Cultural Policy for Soft Power

研究代表者

佐藤 卓己（SATO TAKUMI）

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：80211944

研究成果の概要（和文）：

情報化の先進諸国におけるメディア文化政策の展開を地域別（時系列的）、メディア別（地域横断的）に比較検討し、国民統合的な「文化政策」と情報拡散的な「メディア政策」を明確に区分する必要性を明らかにした。その上で、ソフト・パワーとしては両者を組み合わせた「メディア文化政策」の重要性が明らかになった。佐藤卓己・柴内康文・渡辺靖編『ソフトパワーとしてのメディア文化政策』を新曜社より2012年度中に上梓する。

研究成果の概要（英文）：

This study examined how media-cultural policies had developed in IT advanced countries from comparative view points of areas (by historical approach) and of medium (by cross-media approach). Through the research, we pointed out the importance to distinguish between national integration-oriented 'Cultural Policy' and information diffusion-oriented 'Media Policy'. For intensive Soft-Power they must be combined suitably. The result of this study is due to be published as SATO Takumi, SHIBANAI Yasufumi and WATANABE Yasushi ed., *Soft Power to shite no Media Bunka Seisaku (Media-Cultural Policy for Soft Power)*. Tokyo: Shinyosya 2012.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2010年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2011年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
年度			
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：メディア論

科研費の分科・細目：政治学、国際関係論

キーワード：メディア政策、文化政策、メディア文化政策、ソフト・パワー、文化発信力、メディアイベント、

1. 研究開始当初の背景

代表者・佐藤卓己はドイツ現代史研究からメディア研究をスターとしており、佐藤卓己「ナチズムのメディア学」、『岩波講座・文学2 メディアの力学』（岩波書店、平成14年）などに見られるように、ドイツの情報政策、広報学について関心を抱いてきた。本研究は、国際比較研究のためメディア先進国の文化政策研究で蓄積のある分担者を集めた。特に、Soft Power Superpowers; Cultural and National Assets of Japan and the United States, M. E. Sharpe 2008. および『アメリカン・センター：アメリカの国際文化戦略』（岩波書店、平成20年）でパブリック・ディプロマシー論を展開した文化人類学者・渡辺靖を迎えて、真に学際的な「メディア文化政策」研究の基盤となる枠組みを描きだすことを目指した。他の分担者も、本田毅彦『インド植民地官僚一大英帝国の超エリートたち』（講談社、平成13年）、福間良明訳・スノー『情報戦争』（岩波書店、平成16年）、植村和秀訳・モッセ『フェルキッシュ革命』（柏書房、平成10年）、青木貞茂『文化の力』（NTT出版、平成20年）、柴内康文訳・パトナム『孤独なボーリング』（柏書房、平成18年）などが、本研究と密接に関連する主要業績をもつ研究者である。また、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座メディア文化論専攻の大学院生も共同研究に参加することで、今後の研究拠点形成も企画した。

2. 研究の目的

良好な国際関係を築くうえで、軍力などのハード・パワーではなく、文化の発信に基づくソフト・パワー（ジョセフ・ナイ）の重要性が近年ますます高まっている。こうした潮流をふまえ、本研究は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、日本など、情報化の先進諸国における文化政策の展開を歴史的に比較検討し、ソフト・パワー構築にむけた今後の文化政策に有効な提言を行うことを目的とした。

また、博覧会/美術館、プリントメディア、映画、放送、音楽、インターネットなど個別メディアの先行研究を文化政策との関係で整理し、日本の文化発信の在り方に考察する基本的な前提を用意することをめざした。

3. 研究の方法

(1) 本共同研究では以下3つの研究軸（アプローチ）を使用し、ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策を包括的に解明することを目指した。

①空間軸＝情報先進国のメディア文化政策への地域比較アプローチ（日本および近

隣諸国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスにおけるメディア文化政策の特性と類似性の検討）

②時間軸＝メディア史的アプローチ（個別メディア、すなわち出版、新聞、映画、ラジオ、テレビ、インターネットなど各メディアの相互関連性に着目しつつ、メディア文化政策の編成プロセスを解明）

③イベント軸＝テーマ別アプローチ（政治・外交・軍事や産業・技術・経済の領域のみならず、観光、博覧会、娯楽イベントなど多様な事例を取り上げる）

(2) 上記の3つの研究軸を用いて、21世紀グローバル時代のソフト・パワーの全体的な特徴を明らかにする。

①多メディア間の相互関連性を前提とする各国のメディア文化政策：各メディア間の相互関連性を明らかにしつつ、日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなど情報先進国における文化政策（政府による広報・言論政策）の機能を解明する。また、日本のメディア文化政策の連続性を考察するため、戦前期における台湾や朝鮮など旧植民地に対する広報・宣伝政策についても検討する。

②グローバルなソフト・パワーの相互関連性：各国メディア文化政策（たとえば観光政策や博覧会などを通じた国家のイメージ戦略）がグローバル化の中でもつ相互関連性、いわばグローバルな「メディア文化政策ネットワーク」の可能性を検討する。

③インターネット時代のメディア文化政策に向けた包括的な見取り図：各国のメディア文化政策、ソフト・パワーの相互関連性を立体的に比較検討し、そこから21世紀の国際メディア文化秩序が浮かび上がるような包括的な見取り図を描く。

4. 研究成果

これまでの文化政策研究では主に、企業メセナや公的芸術振興政策、文化産業育成策などの現状分析に重点が置かれてきた。そのため、20世紀前半から現代までを視野に入れた射程の長い国際比較研究はあまりなされてこなかった。本研究ではメディア研究のほか、政治学、文化人類学、社会学、歴史学、広告学、社会心理学など多様なディシプリンの知見を動員して、学際的なメディア文化政策論の見取り図を描くことを目的として開始された。

近年、盛んに使われている「文化力」という言葉は2002年に第16代の文化庁長官に就任した河合隼雄が、グローバル化の進展のなかで文化振興政策として打ち出し概念とされている。しかし、「文化力」という

言葉そのものは、河合隼雄の新造語ではない。1940年代の総力戦体制下に唱えられた戦時スローガンの1つである。当時、統制団体・日本出版文化協会の文化局長をつとめた社会学者・松本潤一郎は総力戦における軍事力、経済力と並ぶ第三の力として、「文化力」の昂揚を訴えていた。こうした事例からも、21世紀のメディア文化政策が20世紀の総力戦体制の延長で発想されていることは否定できない。

本研究は情報化の先進諸国におけるメディア文化政策の展開を地域別（時系列的）、メディア別（地域横断的）に比較検討し、国民統合的な「文化政策」と情報拡散的な「メディア政策」を明確に区分する必要性を明らかにした。その上で、ソフト・パワーとしては両者を組み合わせた「メディア文化政策」の重要性が明らかになった。佐藤卓己・柴内康文・渡辺靖編『ソフトパワーとしてのメディア文化政策』を新曜社より2012年度中に上梓する。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計33件）

- ① 本田毅彦、デリー・ダーバーをどのように考えるか—研究史の整理と今後の展望、帝京史学、査読無、第27号、2012、349-364
- ② 青木貞茂、マーケティングにおけるコミュニケーション論的転回、青山経営論集、査読無、第46巻第3号、2011、27-41
- ③ 青木貞茂、<広告知>あるいは人間学としての広告学 第6回 <広告知>の哲学、日経広告研究所報、査読無、Vol. 259、2011、56-63
- ④ 佐藤卓己、電体主義のメディア史—電腦社会の系譜学に向けて、メディア史研究、査読有、第30号、2011、1-16
- ⑤ 佐藤卓己、<教育番組>としてのスポーツ：歴史的考察と政治機能、月刊民放、査読無、2011年4月号、2011、14-17
- ⑥ 福間良明、「広島」「長崎」の論争とローカル・メディア：被爆体験をめぐる饒舌と沈黙、メディア史研究、査読無、29号、2011、37-54
- ⑦ 本田毅彦、日本社会と『ブリタニカ百科事典』『オックスフォード英語辞典』『イギリス国民伝記辞典』の接触、帝京史学、査読無、第26号、2011、375-396、<https://appsv.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/shigaku26-07.pdf>
- ⑧ 青木貞茂、<広告知>あるいは人間学としての広告学 第2回 文脈創造力としての<広告知>、日経広告研究所報、査読無、

Vol. 255、2011、42-47

- ⑨ 佐藤卓己、世論調査の現実と公議輿論の理想、メディア展望、査読無、第585号、2010、1-5、<http://www.chosakai.gr.jp/news/pdf/2210.pdf>
- ⑩ 佐藤卓己、“輿論の世論化”とファスト政治、都市問題、査読無、第101巻第9号（2010年9月号）、2010、13-17
- ⑪ 柴内康文、地域情報化とソーシャル・キャピタル、行動計量学、査読無、37(1)、2010、19-26
- ⑫ 福間良明、戦後沖縄と戦争体験論の変容（2・完）：沖縄の悲劇沖縄健児隊の刊行、立命館産業社会論集、査読無、46(1)、2010、173-191
- ⑬ 福間良明、戦後沖縄と戦争体験論の変容（1）—終戦から『鉄の暴風』発刊まで、立命館産業社会論集、査読無、45巻4号、2010、16-28
- ⑭ 植村和秀、民族政策としての文化政策—戦間期ドイツにおけるドイツ防衛連盟の活動をめぐって、産大法学、査読無、第43巻第3・4号、2010、51-70、<http://hdl.handle.net/10965/674>
- ⑮ 本田毅彦、「インド共和国の日」とデリー・ダーバー、帝京史学、査読無、第25号、2010、109-139、<https://appsv.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/shigaku25-03.pdf>
- ⑯ 青木貞茂、広告の力を再興するために—広告の超越論的価値と再帰的循環、日経広告研究所報、査読無、Vol. 249、2010、4-13
- ⑰ 福間良明、「戦争体験」という教養、史林、査読有、第93巻第1号、2010、165-196
- ⑱ 渡辺靖、沼田貞昭、松尾文夫岐路に立つ日米関係、外交フォーラム、査読無、2010年1月号、2010、22-33
- ⑲ 佐藤卓己、活字がニュー・メディアになる未来、考える人、査読無、秋号、2009、74-75
- ⑳ 渡辺靖、日本らしさとは何か—アイデンティティと文化外交、外交フォーラム、査読無、2009年7月号、2009、12-17

〔学会発表〕（計19件）

- ① 青木貞茂、つなぐ。人と、文化と、時代と。—広告の社会的関係構築力を追求する。、第42回日本広告学会全国大会、2011年11月12日、近畿大学（大阪府）
- ② 本田毅彦、1903、1911年デリー・ダーバーを見つめた視線、第79回西洋史読書会大会、2011年11月3日、京大百周年時計台記念館（京都府）
- ③ 佐藤卓己、野依秀市から再考するメディア史、九州史学研究会大会（招待講演）、2011年10月15日、九州大学国際ホール（福岡

- 県)
- ④植村和秀、「世界と日本」—二十世紀日本の経験、南開大学日本研究院・中華日本哲学会共催「グローバル化における東アジア文化の価値」国際シンポジウム（招待講演）、2011年9月10日、南開大学・陳省身数学研究所一階会議室（中国・天津）
 - ⑤本田毅彦、デリー・ダーバーにこめられた意図とその効果—キー・パーソンたちの系譜をたどる、日本西洋史学会第61回大会、2011年5月15日、日本大学（東京都）
 - ⑥渡辺靖、（討論者）、ジョセフ・ナイ講演“The Future of Power”、2010年12月9日、国際文化会館（東京都）
 - ⑦佐藤卓己、戦後日本のサブカルチャーにおけるナチ・イメージ消費、国際シンポジウム「日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ」、2010年12月5日、ドイツ文化会館（東京都）
 - ⑧渡辺靖、中間選挙後のアメリカ情勢、日本記者クラブ、2010年11月11日、日本プレスセンタービル（東京都）
 - ⑨渡辺靖、Japan Matters for America/America Matters for Japan (JMA) —協力か？依存か？—日米関係の俯瞰図、笹川平和財団・イーストウエストセンター共催セミナー、2010年11月5日、日本財団ビル（東京都）
 - ⑩渡辺靖、敗戦国の国際文化交流、日本国際政治学会年次大会（国際交流分科会）、2010年10月31日、札幌コンベンションセンター（北海道）
 - ⑪佐藤卓己、総動員体制と〈ファスト社会〉—メディアにおける戦中と戦後の連続性から考える、神奈川県立近代美術館、2010年10月31日、神奈川県立近代美術館葉山講堂（神奈川県）
 - ⑫渡辺靖、日米のソフトパワー、マンズフィールド財団・知日派育成プログラム、2010年10月14-15日、（アメリカ：モンタナ州）
 - ⑬佐藤卓己、野依秀市と実業—世界研究の場、国立国会図書館データベースフォーラム、2010年9月15日、国立国会図書館関西館（京都府）
 - ⑭佐藤卓己、マス・コミュニケーションの系譜学：宣伝/広報と輿論/世論を例に、科学コミュニケーション研究会 第2回研究会、2010年7月24日、東京大学本郷キャンパス小柴ホール（東京都）
 - ⑮渡辺靖、（パネリスト）、第24回日米文化教育交流会議（CULCON）、2010年6月10-11日、議会図書館（アメリカ：ワシントンDC）
 - ⑯佐藤卓己、メディア史の成立—歴史学と社会学の間、関西学院大学社会学部創設50

周年記念連続学術講演会、2010年4月28日、関西学院会館レセプションホール（兵庫県）

- ⑰柴内康文、メディアとむすび：社会関係資本論から、「心が生きる教育のための国際拠点」グローバルCOEワークショップ、メディアの生成—聖俗と社会関係資本から考える」、2009年11月6日、京都大学（京都府）
- ⑱渡辺靖、日米ソフトパワー：地球的課題への取り組み、フルブライト・カルコン合同シンポジウム、2009年6月12日、経団連会館（東京都）
- ⑲渡辺靖、平和のための文化イニシャティブの役割、国際交流基金・ゲーティンステイチュート合同シンポジウム、2009年5月15日、東京ゲーティンステイチュート（東京都）

〔図書〕（計29件）

- ①佐藤卓己、新潮社、天下無敵のメディア人間 喧嘩ジャーナリスト・野依秀市、2012、464
- ②浪田陽子・福間良明編、世界思想社、はじめてのメディア研究、2012、157-163（福間良明、戦争の記憶とメディア：かつて「8・6」「8・9」はなぜ祝祭だったのか）
- ③浪田陽子・福間良明編、世界思想社、はじめてのメディア研究、2012、201-207（福間良明、博覧会と「戦意高揚」—宣伝メディアの機能と逆説）
- ④野上元・福間良明編、創元社、戦争社会学ガイドブック 現代世界を読み解く132冊、2012、33-37（佐藤卓己、総力戦がもたらす社会変動）
- ⑤木村雅昭・中谷真憲編、ミネルヴァ書房、覇権以後の世界秩序—海図なき時代と日本の明日、2012、227-235（植村和秀、テロからの新しい世界）
- ⑥佐藤卓己、岩波書店、現代史のリテラシー 書物の宇宙、2012、252
- ⑦渡辺靖、中央公論新社、文化と外交—パブリック・ディプロマシーの時代、2011、204
- ⑧福間良明、新曜社、「断絶」の錯綜：沖縄・広島・長崎に映る戦後、2011、534
- ⑨NHK取材班編、NHK出版、日本人はなぜ戦争へと向かったのか 下、2011、39-58（佐藤卓己、世論とメディアによる戦意高揚）
- ⑩稲垣恭子編、世界思想社、教育文化を学ぶ人のために、2011、2-25（佐藤卓己、教育のメディア幻想）
- ⑪稲葉陽二、他編、ミネルヴァ書房、ソーシャル・キャピタルのフロンティア、2011、197-216（柴内康文、情報通信技術）
- ⑫Robert Maier, Hrsg., V&R Unipress, Akustisches Gedächtnis und Zweiter

- Weltkrieg, 2010, 123-148 (Takumi Sato,
Im Bann der Rede des Kaisers. Die
Memoralisierung des 'Tags des
Kriegsendes' in Japan)
- ⑬和田春樹・後藤乾一他編、岩波書店、東ア
ジア近現代通史 3 世界戦争と改造 1910
年代、2010、212-230 (本田毅彦、日英関
係とインド問題)
- ⑭植村和秀、講談社、昭和の思想 (講談社選
書メチエ)、2010、174
- ⑮渡辺靖、岩波書店、アメリカン・デモクラ
シーの逆説 (岩波新書)、2010、229
- ⑯竹村和子・義江明子編、明石書店、ジェン
ダー史叢書 第3巻 思想と文化、2010、279
-280 (本田毅彦、『ブリタニカ』の編纂と
女性たち)
- ⑰日本社会学会社会学事典刊行委員会編、丸
善、社会学事典、2010、512-513 (佐藤卓
己、プロパガンダ・広告・広報)
- ⑱青木貞茂、天下雑誌 (台湾にて翻訳出版)、
C型行銷—下一波商品熱賣密碼 (文化の力
—カルチュラル・マーケティングの方法)、
2010、365
- ⑲Lawrence Goldman ed.、Oxford University
Press、Oxford Dictionary of National
Biography, Online ed. (May 2010 update)、
2010、— (Takehiko Honda、Competition
wallahs)
- ⑳辻本雅史編、思文閣出版、知の伝達メデ
ィアの歴史研究、2010、54-67 (佐藤卓己、
《テレビの教養》のメディア史—教育史と
文化史が見落としたもの)
- ㉑高井昌史・谷本奈穂編、世界思想社、メデ
ィア文化を社会学する、2009、161-185
(福間良明、戦後沖縄と「終戦の記憶」の
変容)
- ㉒高井昌史・谷本奈穂編、世界思想社、メデ
ィア文化を社会学する、2009、244-265
(福間良明、「男たちの大和」と「感動」
のポリティクス)
- ㉓井上俊・伊藤公雄編、世界思想社、社会学
ベーシックス 第6巻 メディア・情報・消
費社会、2009、65-74 (佐藤卓己、リッ
プマン「世論」のステレオタイプ)
- ㉔福間良明・難波功士・谷本奈穂編、梓出版
社、博覧の世紀、2009、277-307 (福間良
明、戦時科学の博覧と「聖戦」の綻び)
- ㉕子安増生編、ナカニシヤ出版、心が活きる
教育に向かつて—幸福感を紡ぐ心理学・教
育学、2009、19-36 (佐藤卓己、《NHK
青年の主張》における幸福感のゆくえ)
- ㉖日本社会心理学会 (編)、丸善、社会心理学
事典、2009、420-421 (柴内康文、ソー
シャル・キャピタル)

[その他]

ホームページ等

柴内康文、2009、情報通信と「電縁」をめぐ
って (平成 21 年度情報通信白書コラム)、
[http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/
whitepaper/column_shibanai.html](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/column_shibanai.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 卓己 (SATO TAKUMI)
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：80211944

(2) 研究分担者

渡辺 靖 (WATANABE YASUSHI)
慶応大学・環境情報学部・教授
研究者番号：70317311
植村 和秀 (UEMURA KAZUHIDE)
京都産業大学・法学部・教授
研究者番号：10247778
柴内 康文 (SHIBANAI YASUHUMI)
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：60319457
福間 良明 (FUKUMA YOSHIKI)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70380144
青木 貞茂 (AOKI SADASHIGE)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：50411054
本田 毅彦 (HONDA TAKEHIKO)
帝京大学・文学部・准教授
研究者番号：40246004

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

赤上 裕幸 (AKAGAMI HIROSACHI)
大阪国際大学・人間科学部・講師
研究者番号：30610943
長崎 励朗 (NAGASAKI REO)
京都文教大学・現代社会学部・講師
研究者番号：30632773
白戸 健一郎 (SIRATO KENICHIRO)
京都大学・大学院教育学研究科・博士課程
研究者番号：なし
松永 智子 (MATSUNAGA TOMOKO)
京都大学・大学院教育学研究科・博士課程
研究者番号：なし